



あさがおと迎える冬

満開の花を見せてくれたあさがおが子どもたちと冬を迎えました。茶色に変化したあさがおの様子に、盛夏のあさがおとの違いに気づいていきます。どうして冬になると枯れてしまうのかについて話していたときAさんが、「季節が冬になったから、あさがおも年をとったんじゃないかな。人間も同じで暖かいところで過ごすでしょ。」と語ります。続けて、「木も同じで、葉っぱを落とすでしょ。」とBさん。おそらく神社の木々のコンコンと降り注ぐ落葉の様子にあさがおと樹木のいのちを重ねていたのでしょう。あさがおにも年があると子どもたちは言います。発芽した緑から成熟する黄色、そして晩年の茶色、黒。あさがおの茎や葉の色の変化から年の移ろいを感じているようでした。



子どもたちは、あさがおの根がどうなっているのか関心を示しました。プランターからあさがおの根を出そうとしますが、なかなか抜けません。「うわあ、すごい!」、「こんなことになってる」土の中には糸のように細い根が張り巡らされていました。その根を水で洗い、土の中のアサガオの根っこを両手にもち、冬を迎えたアサガオに節目をつけました。種を蒔いてから100日目を迎えたときに、「わたしはね、今のアサガオの根っこがみたいんだよ」と語ったCさんも、冬を迎えるアサガオの生長の終わりをその根っこの色や張りから感じていました。「ちょっとさみしかった」とDさん。その日の日記にアサガオとの節目をふり返っていました。

きょう、あさがおにおわりをつけました。1日1日そだててきて、あさがおも わたしも みんなもいっしょに大きくなりました。かんさつもして、雨の日は、あさがおひなんもしました。おわりにしたけど、まだ、あさがおは生きていますとおもいます。

Dさんは、「なんか、あんなに小さかったのにね。うわあって感じに大きくなっていったね……」と教室に掲示されているあさがおの生長カードを見て話していました。種を蒔いてから148日目のその日。Dさんも子どもたちもあさがおの土の中に手を入れ込み、その根を洗いながらどのようなことを感じていたのでしょうか。そうして迎えた今、「まだ、あさがおは生きています」というDさんには、どんなあさがおとのこれまでがあったのでしょうか。植物の形としては残っていない今のあさがおに、Dさんが感じるその《いのち》を思うのです。

子どもたちは今、題材「冬に灯る あさがおの花」で、灯籠づくりに取り組んでいます。夏に咲いたあさがおの花で押し花を使いました。冬になってもあの時の美しい姿が残っています。あさがおは生きています。そう感じる子どもたちの言葉の通り、一緒に育ってきたあさがおが子どもたち一人ひとりの心の中で「わたしの明り」となって灯っていくことでしょう。

